

ベトレヘムの風 No.90 記念号

創立85周年を迎えて ～100周年へ向かって～

院長 青木 信彦

ベトレヘムの園病院開設85周年記念の催しは、平成30年10月24日にしめやかに院内リハビリ訓練室特設会場で挙行されました。出席していただいた多くの皆様に心から御礼申し上げます。式典では開設者フロジャック神父様の崇高な理念「生きることは 愛すること」が85年後の今も一点の曇りなく脈々と受け継がれていることが確認され、出席者全員が感動しました。

フロジャック神父様の開設の苦勞と共に、今の私たちが肝に命じなくてはいけないことがもう一つあります。考えてみましょう：開設したものの、資金も頼るツテもないベトレヘムの園病院をけんめいに支えてきたのはシスターなのです。開設当時の時代背景を考えますと、常人の成せる技ではなく、崇高な信仰心のみが頼りであったと言われています。そして、今のシスターの多くは戦後間もなくの昭和20年代にシスターとしての活動を

開始されたと聞いています。その方々が辛苦をなめながら今のベトレヘムの園病院を守ってきました。

ベトレヘムの園病院創立100年に向けての大きな目標は、病苦に苛まれる多くの人々を救ってきたこの病院を支えてきた方々への「恩に報いる」ことです。とくに青春時代のすべてを投げ打ってベトレヘムの園病院に貢献されたシスターの皆さんが、ここで最後の羽を休め、使い果たした身体についても気兼ねなく世話を受けながら天国へ出発する、そのような病院になることを切に願っています。



❖ 創立85周年を迎えて

副院長 井上 仁

85周年おめでとうございます。歴史的なひとときを皆さまと一緒に迎えることの御縁に感謝します。

ベトレヘムに入職して1年半、ひとり一人の患者さんから多くのことを皆さんと一緒に学んできました。社会の価値観が変化し、高齢社会が加速していくなか、患者視点とか包括的とか言いながら、多くの病院や医療者は医の原点に回帰できずジタバタしているのが現状ではないでしょうか。

長い道のりを想い慕い、最期を当院で過ごされることに感謝し、人生のフィナーレを穏やかに演出しながら、私たち自身が優

しさとやりがいに満ち溢れていくのがわかります。日本一の慢性期病院への道のりは遠いかもしれませんが、深く濃い意味で「天国にいちばん近い」病院（あるいは庭園とか、あるいは法人とかに置き換えるのもよろしいか）として堂々と名乗ることのできる日を楽しみにして、この空の下で私たちにできること、求められていることをしっかり見定めていきましょう。

❖ 創立85周年を迎えて ～呼吸も吐くことが大事～

看護部長 窪田 由佳

現代はたくさんの情報にあふれ、物にあふれ、先の見えない混沌とした未来に息が詰まりそうになるのは私だけではないでしょう。この難しい時代を、100周年に向けどうかじ取りしていったらよいのか？大河ドラマ「西郷どん」の篤姫の言葉に「天下を治

めるのは戦をするより難儀」とあった。さて何をしたらよいのか。それはフロジャック神父がその時々弱者の為に動いたように変わり続ける事だと思う。80周年からの5年間でも介護病棟がなくなり患者の重症化、看取りの機会、家族ケアの機会も増えている。そんな中「尊厳を大切に看護、介護」を目指し変化し続けている。変化のスピードも加速する今後、スタッフ1人1人が考え、自分のできる事をどんどん吐き出す。理念に向かって楽しんで実践するたくましい看護部になる希望と覚悟をもっている。

❖ 創立85周年を迎えて

事務部長 菊池 誠

地域の皆様と医療・福祉の事業者や行政の方々に、そしてカトリックの仲間たちに支えられ、当院は今年創立85周年を迎えることができました。この誌面をお借りし、改めて感謝申し上げます。85年前の1933年は、日本という国が今ほど豊かではなく、ほとんど無謀な戦争に突き進んでいく暗雲たち込めた時代でした。

私たちの創立者はこの困難な時代に、自分たちは何を成すべきかをしっかり見極め、思いだけに留めず、多くの「事業」として形に残しました。長い時を経て、慈生会の各事業は、社会にとっての「財産」、職員にとっての「誇り」となっております。来る創立100周年へ向けての私たちのミッション、それはこの「財産」を守るだけではなく、「誇り」を支えにし、育て発展させていくことだと考えます。これからも創立者の思いを「カタチ」にしていくなを、職員一丸となって重ねていく所存です。引き続き皆様のご指導、ご支援を心よりお願い申し上げます。



第18回 ベトレヘムの園病院 研究発表会]

日時:平成30年10月24日(水) 14:15~16:45

恒例の院内研究発表会を今年も開催しました。

各部署から日頃の積極的な取り組みの紹介があり、実りの多い時間となりました。記念講演は創立85周年を記念しての特別企画として、カトリック司祭の星野正道神父様に講演をお願いしました。

< 1 > 「看取り期」に何を見て何を考えるか改革

～当院の看取りに対する調査～

看護部 ●山崎明子

<協力>窪田由佳・保田しのぶ・富田まさ子・須田加矢子

「看取り」の件数が年々増加する中、看取り期の関わりについて多職種への意識調査を通して課題を抽出。

< 2 > 夜勤業務変革への取り組み

～介護療養病床30床を廃止、全56床が

医療療養病床に転換～

看護部 ●百々明子・遠藤かほる・丸山明美・草野広美・岩川祥平

2025 年問題を踏まえ、介護から医療療養病床に転換を実現する為に行った夜勤業務改善について報告。

< 3 > 命を慈しむ関わり

パストラルケア室 ●平野のぞみ

創立者の理念「いのちを慈しむ」とスピリチュアルケアとの接点を見出す。一患者との関わりを事例で紹介。

< 4 > 薬剤科から見たCV患者の動向

薬剤科 ●平澤佑実彦・後藤佐恵子・小熊梢

昨年より受け入れ始めたCV患者の入院期間調査から、病状の動向を検証、一般患者との比較を試みた。

< 5 > 薬剤科の新しい取り組み ～病棟業務～

薬剤科 ●小熊梢・後藤佐恵子・平澤佑実彦・滝谷廣子

医療の質向上の為の新たな取り組みとして、病棟薬剤業務を開始。リスク・業務負担軽減等の効果を確認。

< 6 > 酵素の力 ～栄養科の取り組み～

栄養科 ●湖屋潔

「肉は固くて食べにくい」との視点から、蛋白質分解酵素を用いた「食べやすさ追求」の取り組みを紹介。

< 7 > 協会けんぽ受診者 2人受入れ体制の構築について

～その1 現状把握・受診者アンケートより～

臨床検査科 ●大谷佐江子・安積和子・阿部愛・佐藤亜矢

受診者アンケート結果を検証し、受入拡大の為の方策を、利便性、待ち時間、訴求対象など多面的に探る。

< 8 > 受傷後13年を経て改善をみた腕神経叢麻痺の一例

リハビリテーション科 ●鈴木隆宏（医師）後藤昌子

受傷から一定年数経過した患者の機能回復を、作業療法で試み、改善させるに至った取り組みを紹介する。

< 9 > 笑顔を取り戻すために私たちに出来ること

～小さな病院の大きな夢～

事務部 ●菊池誠・大和理恵・宮本佳苗・大崎佐智子

当院の「地域公益活動」、ワークサポート・カフェ・学習支援を紹介。職員の「価値観」を変える取り組みの将来性を提言。

《ベトレヘムの園病院 創立85周年記念講演》

『創立者フロジャク神父の思いに生かされて

～変わりゆく時代にあって変わらないものを～』

カトリック司祭 星野正道神父様

創立85周年記念講演として、「ベタニアの家」そして慈生会とゆかりの深い、カトリック司祭・星野正道神父様よりご講演を賜りました。テーマは『創立者フロジャク神父の思いに生かされて ～変わりゆく時代にあって変わらないものを～』、今も私たち一人ひとりの仕事の中に生きている創立者の思いを、改めて心に刻みつけることが出来たひとときでした。

お話の中で特に印象深かった箇所は、旧約聖書の『出エジプト記』の「男児殺害の命令」の一節です。エジプト王が二人のヘブライ人の助産婦に、ヘブライ人の出産を助ける時、男の子が生まれたらすべて殺しなさいと命じました。ヘブライ

人の男子がいずれエジプト王の敵となることを怖れての命令だったのでしょう。しかしこの命令に対して、ヘブライ人の助産婦たちは、「偽ってはいけない」という掟を犯してまで、エジプト王に嘘の説明をし、生まれた男の子たちを助けました。神は助産婦たちのこの行為に対して、恵みを与えられた、と結んでいます。

キリスト教が何よりも大切にしている価値観、それは「いのちの尊厳」を守ることです。そしてその価値観を実践したのは助産婦という「医療従事者」であったことに、私たちは驚きを禁じ得ません。旧約聖書の冒頭に近い節で医療従事者が「いのちの尊厳」を守ったという話は、私たち医療に携わる者にとって、大いに示唆に富み、また勇気づけられるものでした。この貴重な気づきを下さいました神父様に、本誌面を借りまして、心より感謝申し上げます。（事務部長）





開設85年記念 職員懇親会

1933年
10月
療養農園
「ベトレヘムの園」
(収容人員60名)
開設から85年!



これから先5年、
10年、そして20年先も、
創立者が
“事情に押されて始めざるを得なくなった”
というその心を
しっかりと受け継ぎ
「心と身体と魂に、
やすらぎを運ぶ
かかわり」を
続けていきたいと思います。



ベトレヘムの園病院
の未来
(10～20年後)
予想

1 階病棟

「笑顔いっぱい1階病棟」のキャッチフレーズをかかげ5年前から新体制で頑張っています！

定年を迎えるスタッフもちらほらですが、皆で助け合っています。いつもの顔、新しい顔とスタッフも変わりますが“慈しみの心”を持ってこれからも10年、20年、30年とベトレヘムの園病院で患者・家族に寄り添った看護、介護を目指して邁進します。

(師長掛け声) みんな～がんばるよ～ファイト

(スタッフ) お～！



リハビリテーション科

『少しでも笑顔になれるお手伝い』これは、リハビリテーション科が掲げるスローガンです。この言葉には、療養生活を送る患者一人一人と向き合い、その人らしさを受け入れ、共に過ごす時間を大切にしたいという私達スタッフ全員の想いが込められています。リハビリを通して笑顔が見られる場面を作りたい。私たちは強い思いを持って頑張っていきます!!



薬剤科

10年～20年後の薬剤科は、技術革新により調剤は完全自動化になっていることでしょう。

そのとき人間である薬剤師は、薬についての専門知識が詰まった頭はもちろんのこと、その五感をフルに使い、そして何よりも心を遣って働き、病院の要としての役割を担って皆様の役に立つ存在となっている頼もしい姿をお見せできると思います。



2 階病棟

80周年記念式典より、あっという間に5年が経ち、時の流れの速さに驚きを感じます。

現在、2階病棟で1番お姉さまの患者さまは、2人いて104歳です。このうちのお1人は、平成24年から入院して頂いています。もはや家族です(笑)。この2人の患者様を筆頭に大正生まれの女性患者さまが、あと2人、男性患者さまが4人います。あと5年もすると何人かの患者さまたちは、100歳を迎えることになります。次の元号は、まだ分かりませんが、いつも院長先生がおっしゃっているように、日本一の療養病院となれるよう、また、どうすることが日本一なのかを考えながら、新しい時代に向かって、なくてはならない地域の療養病院であり続けられるようチーム力で頑張っていきたいと思っています。



栄養科

10年～20年前の栄養科の実情を思い返すと、献立は手書き、栄養価の計算は電卓をたたいていました。現在ではほぼ全てパソコンで処理され多くの時間が短縮されました。10年～20年後の未来には医療現場でもAI(人工知能)が活用されるでしょう。英オックスフォード大学のAI研究では、702職種

のうち生き残れるランキングで栄養士は11位だそうです。フードサービスはアナログなもので、人対人に柔軟な対応をとることが求められるからだと考えます。この先どのように変化していくか分かりませんが、栄養科の使命である食事提供をこれからも続けていきたいと思っています。



外来・中材

10年後、20年後のベトレヘムの園病院は、どのようになっているのでしょうか。

自然に囲まれたのどかな環境、四季折々の草花が咲く中庭は、この病院で働くスタッフそして、患者さまの癒しの空間になっているかと思います。心地よいこの空間で、スタッフ一人ひとりが、それぞれを尊重し、理解しながら働いていくことが、あたたかく、やすらぎの療養型病院として10年、20年と続いていくのだと思います。



放射線

「この放射線検査室で20年後も働き続けよう。」

コンピュータ・テクノロジーで形成された最新画像検査は、知識・技術習得が必須であった。学ぶ事は困難であった。二人は諦めなかった。わずかばかりに分泌する成長ホルモンに期待を寄せ頑張った。ネットワークを駆使して文献検索を行い学んだ。有酸素運動と筋肉のトレーニングをも重ねた。いつしか、二人の頭脳と肉体は劇的な変化を遂げた。その容姿は、まさしく「青年」。

ベトレヘム100周年のその日、ベトレヘムの園病院には怪物のような二人の姿があった。病棟のベットのの上に(笑)。



事務部

細い糸を紡いでいくこと…結びつけていくこと

超高齢社会の訪れ、社会保障の先細り、マンパワー不足など負の話題、医療情勢の目まぐるしい変化の中、10年後も20年後も緑の木々に囲まれながら、ベトレヘムの園病院の穏やかな息遣いが続いています。その理由は、時に荒波がやってこようと、穏やかな時間が流れる努力を、事務部は緑の下で力持ちとして続けていたからです。と…辱めもなく胸を張って言えるよう、地に足をつけてベトレヘムの歴史を紡ぎ、次の世代に結び付けていきたいです。



臨床検査科

今後とも、正確かつ迅速に検査結果を届けること、検査のとき患者さまの不安が和らぐように接することを常に意識しつつ、八十周年記念に植樹された記念樹の成長や中庭の四季折々の風景をいつでも楽しめる素敵な環境(検査室)を大切にしていきたいと思っています。

